

今がモモせん孔細菌病の防除適期です！

モモせん孔細菌病の発生は前年の伝染源量が大きく影響するため、常発地や昨年発病を認めた圃場では本年も多発する恐れがあります。本年は3月以降の気温が高く推移しており、例年ではほとんど確認されない春型枝病斑（スプリングキャンカー）が4月3日から散見されています。さらに、4月5日発表の広島地方気象台の季節予報（1か月予報）によると、今後1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か多いとされており、本病の発生を助長する条件となっています。これらのことから、本年は病原菌の動きが例年より早く、今後の発生も多くなる可能性があるため、**4月第2週頃を目安に第1回目の薬剤散布（ストレプトマイシンを含む剤）を行い、その後も約10日間隔の定期的な防除を徹底しましょう。**

1. 防除対策及び防除上の参考事項

- （1）本病原菌は、春頃の気温の上昇とともに形成される春型枝病斑（図1、紫褐色のへこみを生じ、芽枯れを伴うことが多い）から雨滴及び風で飛散、伝染します。**発病枝は、葉や果実への重要な伝染源となりますので、見つけ次第、除去・処分しましょう。**
- （2）殺菌剤による防除は予防散布が基本です。多発してからは効果が劣るので、**早期の防除**を心がけましょう。ただし、**予防効果の高いストレプトマイシンを含む剤の使用時期は「収穫60日前まで」、総使用回数は「2回以内」です。極早生種や早生種に使用する場合は、本年はモモの生育が5日程度早まっているので使用時期に注意しましょう。**
- （3）果実の感染防止のため、早めに袋かけを行いましょ。袋かけは、薬剤散布後速やかに行いましょう。
- （4）病原菌は葉や果実の表面（気孔など）や傷口から侵入します。風当たりの強い圃場では防風ネット等で防風対策し、病原菌の飛散を防ぎましょう。

【主なモモせん孔細菌病の防除薬剤】

(H30. 4. 4 現在)

薬剤名	農薬使用基準		
	希釈倍数	時期	回数
ストレプトマイシンを含む剤		収穫60日前まで	総使用回数 2回以内
ストマイ液剤20	1,000～2,000倍		
アグレプト液剤、同水和剤	1,000～2,000倍		
ヒトマイシン液剤S	250～500倍		
マイシン20水和剤	1,000～2,000倍		
アグリマイシン-100	1,500倍		
スターナ水和剤	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
バリダシン液剤 5	500倍	収穫7日前まで	4回以内
マイコシールド	1,500～3,000倍	収穫21日前まで	5回以内
マスタピース水和剤 ^{注1)}	1,000～2,000倍	収穫前日まで	—

注1) マスタピース水和剤は微生物殺菌剤であるため単用が望ましい

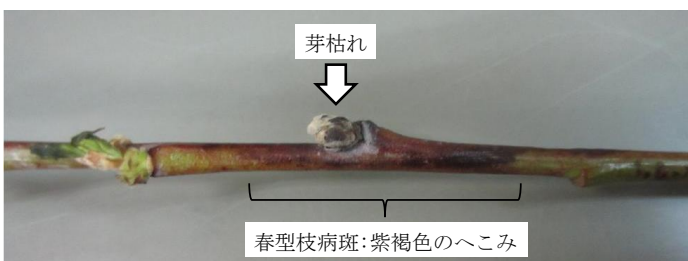


図1 春型枝病斑（スプリングキャンカー）



図2 せん孔細菌病の発病葉及び幼果の初期症状

農薬の使用に当たっては農薬使用基準を厳守するとともに、ドリフトに注意するなど、安全・適正に使用するようお願いします。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。

アドレスは、http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。

